

人気ファンド、2016年のトレンドは

アセットアロケーション型が存在感増す

ドイチェ・アセット・マネジメント

資産運用研究所

所長 藤原延介氏に聞く



2015年の投信市場は、販売面からは年間で見るとリーマン・ショック以来の資金流入を記録した1年になったといえる。まだ12月のデータが出ていないが、ETF（上場投信）を除く追加型で年間8兆円強の資金流入超になりそうだ。もっとも、1~9月までは資金流入が比較的好調だったが、10~12月の資金流入は低調となつたようだ。中身となると、市場環境に応じて投資資金を複数の異なる資産に機動的に配分するタイプのアセットアロケーション型ファンドや、ラップ口座を経由した投信市場への資金流入などで、これまでとはトレンドが変わった。14年から人気が高まってきたアセットアロケーション型を任せるタイプの商品が、投資のすそ野が少しずつ拡大する中で存在感を示してきたのではないかと考えている。この部分は10~11月を見ても販売はあまり落ちていない一方、解約が出にくい商品性もあって、残高が順調に積み上がっているとみてる。資産配分の一部として、REIT

Tやハイイールド債、新興国の株式や通貨に向かう資金とは別に、安定的な資産運用を求める資金がアセットアロケーション型ファンドやラップ口座に流れる動きは16年も続くと予想している。

また、日本株ファンドへの資金流入は2兆円前後と、15年は大幅なプラスで終わりそうだ。06年にも日本株ファンドの販売が盛り上がった時期があったが、1年を通じて見ると00年以来の高水準になったものとみている。日本経済への期待やインフレ見通しが変わってきたことが背景にある。15年は日本株相場の変動が大きかったが、下がった局面ではまとまった買いが見られ、上がってもそれほどは解約が出なかったという面がある。相場観を持った投資経験者は、インデックスファンドを活用して短期で売買するケースも見られるが、15年のトレンドとしてはアクティブ型の日本株ファンドに継続的に資金が流入していた。アクティブ型の日本株ファンドは、営業員を介し

て販売するケースが多いとみられ、アドバイスを通じて日本株ファンドを買った投資家が長期で保有するケースが増えていると考えられる。

新発のファンドでは当初設定額が1000億円を超えるような大型設定のファンドが少なかった。その中でも、比較的まとまった資金を集めたのは日本株ファンドがほとんど。もっとも、日本株に限らず、最近はテーマ型の株式ファンドの流れも出てきたようだ。全体として見れば、新規設定ファンドより、むしろ既存ファンドでREITファンドなど長期にわたって運用されているファンドが見直されるとともに、継続的に販売される傾向にあった。一方で、債券ファンドは新規設定に限らず、既存ファンドでも苦戦したものが多くあった。当局の監督指針などの影響もあって、古くからある、パフォーマンスの良いファンドに資金が向かうトレンドに少しずつ変わりつつあるようだ。